



いちじょう・ひでのり

1985年東京医科歯科大学歯学部を卒業。1990年同大学院歯学研究科修了。1990～1993年スウェーデンのルードヴィック癌研究所に留学。1993年東京医科歯科大学口腔病理学教室助手。(財)癌研生化学部研究員を経て、1998年東京医科歯科大学教授。2002年より東京大学大学院薬学系研究科教授。東京大学創薬機構長兼任。2016年日本分子生物学会年会長。

卒業生の今 活躍する医科歯科人

個体・疾患・創薬を意識し 基礎研究にまい進

東京大学大学院薬学系研究科
細胞情報学教室 教授

一條秀憲氏

Hidenori Ichijo

創薬に生命の分子・原子レベルでの理解が不可欠となっている。

一條秀憲さんは東京大学大学院薬学系研究科でストレスによる細胞死などをテーマに研究をしている。

大学院で、がん細胞ではある種のホルモン(TGF- β)の応答が通常と異なることを発見し、細胞内シグナル伝達の研究に着手。

最初の転機は、宮園浩平氏(現東大医学部長)の

チームの一員としてスウェーデンのルードヴィック癌研究所に留学したこと。

TGF- β 受容体遺伝子のクローニングに必死で取り組み、

チームは遺伝子のハントニングに成功し

たが、一條さんのアプローチで得られたのは別の遺伝子だった。しかし同時に非常に多くのことを学んだ3年間だった。カール・ヘル

ディン所長(現ノーベル財団議長)の「There is no protein without function」の一言にも後押しされ、帰国後も分子の機能とメカニズムの研究を続けることを決意する。

1997年に物理化学ストレス



に応答して活性化するASKファミリーを見出し、第2の転機になった。30代で、「研究の全てに責任を持つラボのヘッドになる」目標をかなえ、母校で教授として研究室を持つ。

第3の転機は東京大学へ移った頃。自分が先頭に立って指示を出すばかりではなく、学生や若い研究者からの発言を辛抱強く待つようになった。

「能力とやる気はあるのに、経験と専門知識が不足している。そういう学生の力を引き出していくと、研究室もいい方向に回っていくような気がします」

薬も広い意味では人間にとってのストレスとなり得る。ストレスシグナルの研究は、疾患の標的だけではなく、薬剤の選択、安全性の評価などにも応用できるため、製薬業界の注目も高まっている。

「出口ありきの研究ばかりでは、バイアスがかかってしまいます。私のスタンスは、疾患を意識しつつ、あくまでも『分子から機能へ』です」と語る。自ら基礎研究に徹し、その重要性を説いている。

B

東京大学大学院薬学系研究科

東京都文京区本郷7-3-1 03-5841-4702

<薬科学専攻>【有機薬科学講座】薬化学、有機反応化学、有機合成化学、天然物化学、基礎有機化学【薬用植物化学】(薬用植物園)【物理薬科学講座】生体分析化学、生命物理化学【生物薬科学講座】衛生化学、生理化学、分子生物学、遺伝学、細胞情報学、蛋白質代謝学、[協力講座:細胞生物化学(医科研)]、[寄付講座:疾患細胞生物学]

<薬学専攻>【創薬学講座】薬品代謝化学、蛋白構造生物学、微生物薬品化学、[協力講座:生体化学(分生研)]【医療薬学講座】分子薬物動態学、薬品作用学、機能病態学、[協力講座:臨床薬物動態学(病院)]、[寄付講座:育薬学]【社会薬学講座】医薬品評価科学、[寄付講座:医薬政策学]、[寄付講座:ファーマコビジネス・イノベーション]

